

『ジェルマン・ヌーヴォーの祈り』

— AVE MARIS STELLA —

権 藤 南海子

はじめに

神秘的放浪詩人と言われているジェルマン・ヌーヴォーの「祈り」と言うべき作品、『アヴェ マリス ステラ』は、毎年ブリーエールのノートルダム教会で、聖母マリアを称えて詠誦されるのですが、通常の祈禱と異なり、何故か、ブリーエールの土地の人々が、又、地中海近辺の在野の詩人達が、徐々に興奮していき、他国（フランスの他の県と外国）からやって来た研究家達と大きな対照を見せているのに気付かされます。作者が一九二〇年に亡くなっているため、実際に詩人を見知っている老人が何人か存命で、そのうちの三人（男二人、女一人）から、筆者自身一九七八年五月二日に話を聞く機会を得ました。彼らが共通して詩人に対して抱いているイマー

ジュは、「なにしろ汚なくて、臭い人で、葡萄酒以外は決して施を受けようとせず、ゴミ箱を漁って、その日の糧を得、いつも革のバンドで自分を打ちながら、フラフラと歩き、教会のミサには必ず出席していた」ということです。それも「必ず入口の傍に立っていた」ということです。老女の話では、「親から、「偉い人だから馬鹿にしてはいけないよ」と言われていた」そうです。そして彼女は、「嫌々ながら、母の命令で、パンなどを、雨の日に詩人の住むアパートに持っていったことがある」のだそうです。そして三人で、詩人の生家に案内してくれ、「もともと地主だったし、先祖は領主だった」と話していました。パリの教授方は、「何事も書類や、村役場の証明書のみを信頼すべきである」と考えておられますが、その彼等でさえ、詩人の最後の十数年は、ドラエイ

等の文章からよりも、村人達からの証言を採用しておられるように思いますし、事実村人達は、狭い共同体の中で、毎日詩人を見て暮っていたのですから、私は、はっきり村人達の証言としてここに記しました。

この詩の正式の日付が、一九二二年二月二七日、プーリエール（ヴァール県）となっておりますが、とりもなおさず、それは、詩人が既に故郷に最終的に戻って五ヶ月経ち、ゴンベール塔と呼ぶ薄汚ないアパートに居を構えてから三ヶ月余経過した頃に出来上った作品、即ち、既に苦行を始めていた時代の創作なのです。四行詩 *Sans verte étoile au ciel*、⁽¹⁾を書いていた頃のヌーヴォーは、フランス人には珍らしく、受動的な人間であることを示していました。しかし、「苦行する」ということは積極的でなければならぬ筈なのです。彼は、全てをゆだねることのできない人間、安心立命を得ることのできなかった人間だったのでしょうか。そういう疑問から、この長詩を研究してまいりたいと思います。

一

漂泊の詩人 Germain-Marie-Bernard NOUVEAU が、自ら出版を望んだ唯一の作品、それが、『AVE MARIS STELLA』です。ヴァルセル氏は「C'est

probablement en 1910 que Nouveau achève la première version de son poème. (Pl. 750) 恐らくヌーヴォーは一九一〇年に彼の詩の最初のテキストを完成していたであろう。」と書かれており、続けて、ヌーヴォーが従弟 Léopold SILVY に宛てて書いた手紙の文を引用しています。それは、「七〇行から八〇行の軽い小冊子を作る費用を出してくれるように Sidore 伯父に勧めてくれ」と頼んでいる手紙⁽³⁾なのです。しかし、結局のところ一九二二年六月に Aix の Tournel 印刷所から『AVE MARIS STELLA』として、八頁の仮綴じ本が出版されました。百十行の長い詩ですが、原文を引用致します。

À genoux sous ma voile,
Je te salue, Étoile.
Étoile de la mer,
Garde-nous d'abîmer.

5 L'oiseau pêche en eau basse,

On part, vive l'espace!

Mais tout beau! mon neveu:

Souvent, hors de tout feu,

Le temps trop tôt se gâte.

¹⁰ Et ce fier brick démâte
Si la Vierge n'y luit,
Tout périt cette nuit.

À genoux, etc.

Mais vois dans cette pièce,

¹⁵ Comme à la sainte Messe,
Les cierges éclairés,
Ce lit, ces traits tirés,
Et ce groupe où l'on prie
L'image de Marie.

²⁰ Vite, acquiesce à leur vœu,
Bonne mère de Dieu.

À genoux, etc.

Dans notre nuit profonde,
Voguant au gré de l'onde,

²⁵ ÉTOILE DE LA MER,
Sur les écueils du monde

Garde-nous d'abimer.

Notre Havre-de-Grâce,
Garde-nous, etc.

³⁰ Vierge de notre place,
Garde-nous, etc.

Tableau de notre classe,
Garde-nous, etc.

Médaille que j'embrasse,

³⁵ Garde-moi, etc.

À genoux, etc.

Sous drap d'or moult accorte,

Ayant sceptre en ta main,
Au bras ton soleil fin,

⁴⁰ Vêtu de même sorte,
Qui couronne aussi porte,
Aussi bien, en ce lieu

En ce «lien de Porrière»,
(Qui ne te doit pas peu),

⁴⁵ Douce Vierge d'un Vœu,
Toi notre bonne Mère,

Appuie auprès de Dieu
Les paroles de feu
De toute humble prière
⁵⁰ En ce lieu de Porrière,
Douce Vierge d'un Vœu.

À genoux, etc.

Toi qu'à doux sons de corde,
Les anges, dans leurs chants,
⁵⁵ Nomment Dame céans .
De par Miséricorde,
Ah ! du moins, fais qu'ici
Le bon Dieu nous accorde,
Avec Paix et Concorde,
⁶⁰ Sa grâce, et sa merci.

À genoux, etc.

Étoile hospitalière,
Maison du matelot,
Vers les rades d'Hyère,

⁶⁵ Remets sa barque à flot ;
De Fos à Cavalaire,
Pour les rêts d'un pêcheur,
D'un lyon fort colère
Modère un peu l'aigreur.

⁷⁰ À genoux, etc.

Donne à veuve amis sages,
Qui te prie au saint lieu ;
À l'orphelin bons gages,
Qui ne soient pas un jeu ;
⁷⁵ Au pauvre bons visages,
Qui n'a logis ni feu ;
À tous bons voisinages,
Bonne Mère de Dieu.

À genoux, etc.

⁸⁰ Garde-nous en voyage
Et sur terre et sur mer ;

Garde-nous, etc.

À la course, à la nage,
À manier le fer ;

⁸⁵ Garde-nous, etc.

Sur mon échafaudage⁽¹⁰⁾
D'où Pierre est chu d'hier

Garde-nous, etc.

Sous le vent qui fait rage,
⁹⁰ En plein cœur de l'hiver ;

Garde-nous, etc.

Sous les feux de l'orage,
Car j'ai peur d'un éclair ;

Garde-nous, etc.

⁹⁵ Contre azur sans nuage
Qui cesse d'être cher ;

Garde-nous, etc.

Sur fleuve qui ravage
Et qui peut coûter cher ;

¹⁰⁰ Garde-nous, etc.

S'il faut faire naufrage,
Surtout de male mort :
Et de rendu plus sage
Conduis la voile au Port.

¹⁰⁵ Louange à Notre-Père,
(Amour à Notre-Mère),
Et gloire à Jésus-Christ ;
Honneur il sied de faire
Le même au Saint-Esprit.

¹¹⁰ Ainsi soit-il.

(pl. pp. 755-758)

掛けます。

以上のように、最初の一小説が繰り返し句となつて、次に続く七つの節の後に繰り返されます。八節目迄は、行数が八・八・十三・十五・八・八・八となりませす。しかし、十三行から成る第四節目は、意味の上からは、

五十八の二節と考へたほうがよいようです。何故なら、前述したミサで、村人達と共に祈りの歌として朗唱される折、第一、二、三節目は、司祭又は朗唱者が指導者となつて唱え、繰り返し句のみを、他の全員がわめくが如く歌うのです。ところが、この第四節目は、前半五行を指導者が読み上げ、後半八行は、掛け合いのように、指導者、残り全員の間で歌われます。次に続く繰り返し句は指導者が読みませす。次の節からは元に戻り、五・六・七・八節目は指導者、繰り返し句は残り全員となりませす。そして、九節目から七回続く二行だけの小節は指導者、それに應ずるよう、その二行の後の繰り返し句

Cardenous d'abimer. を残りの全員が唱へませす。そして、最後の二節を指導者が敵そかに読み上げ、最終行の *Ainsi soit-il.* を全員で唱え、終ります。この詩が一九六二年以来村人達によって毎年飽きもせず、歌われているのは、作者が難解な言葉を一切使わず、その地方の人なら子供から老人まで普通に話している言葉を用いて、いることに起因していると思ひませす。では行毎の直訳を心

『海の星への祈禱』

僕の帆の下に膝まづいて、
僕は貴女に祈ります、星よ、
エトワル・ド・ラ・メール、海の星、
僕らを難破から守り給へ。

鳥達は浅瀬で漁をする、

僕らは船出する、天空万歳！

何て良い天気だ、お若いの、

しばしば、総ての光を無くし、

天気はあまりにくずれ易い。

ご自慢の帆船はマストを折り、

聖処女がそこに輝かねば、

皆は、その夜悲業の死を遂げる。

繰り返し句

この場所をどうか見て下さい、
まるで神聖なミサでのよう、
灯をともした多くの蠟燭、
これらの憔悴した顔つきを、
この台座、マリア様の像に、

お祈りをしているこの一団。
早く、神の善良なる母よ、
彼らの願いを受け入れ給え。

繰り返し句

僕らの深遠な夜の中で、
世の中の暗礁に臨んで、
流れのまにまに漂って行く、
エトワル・ド・ラ・メール、海の星！

僕らを破滅から守り給え、
僕らの平和を祈る処、

僕らを汚れから守り給え。

僕らの居る場所の聖処女よ、

僕らを汚れから守り給え。

僕らの教会の宗教画、

僕らを汚れから守り給え。

僕が頼ずりするメダイユよ、

僕を汚れから見守り給え。

繰り返し句

安いが優美な金のランチャで、
貴女の手には笏を携えて、
腕には貴重な聖体入れ、
金色の衣を身にまとうて、

太陽型の冠を着け、

同じように素晴らしい、この地で、
プリーエールのこの地において、
(貴女にとつては少なくともはない)

願ひ叶える甘き聖処女、

神の傍に据えられている、

貴女は僕らの善なる母、

数々の一心不乱の言葉、

全くつつましい願ひごとの、

プリーエールのこの土地において、

願ひ叶える甘き聖処女、

繰り返し句

貴女を、弦の甘い音色で、

彼らの歌の中で、天使らは、

その場所の支配者と名付ける、

あわれみの命ずるところにより、

ああ！ 少なくとも、ここでなさい、

良き神が僕らに許し給う、

平和と和合を以ってすれば、

神の憐みと神の恵を。

繰り返し句

見知らぬ者をもてなす星よ、

水夫の館、メゾン・デュ・マトロ、
イエールの停泊地に向う、
波浪に小舟を戻し給え。

フォスからカヴァレールに到る迄、
一漁師の捕獲網のために、
吠えるライオンのような嵐の、
荒々しさを少し和らげよ。

繰り返し句

与え給え、聖なる地で祈る、
未亡人に賢き友人を、

気紛れからではあるべきでない、
充分な保証を身無し子らに、
栖もなければ炉をも持たない、
貧しき者には良い顔色を、

もろもろの者に良き隣人を、
神様の善良なる御母、

繰り返し句

旅にある僕らを守り給え、
陸において、又海において、

僕らを被害から守り給え。

走る場合に、泳ぐ場合にも、
短剣で戦っている時に、

僕らを怪我から見守り給え。

ピエールが昨日落ちてしまった、
僕の組み立て足場の上で、

僕らを過失から守り給え。

猛威を振う強風の下で、
無慈悲な真冬の中において、

僕らを被災から守り給え。

嵐の多くの閃光の下、

僕は稲妻が恐いのです、

僕らを破滅から守り給え。

珍しいことであるのをやめた
雲一つない空に対して、

僕らを破滅から守り給え。

甚大な被害を与えている、
犠牲を払わされた河でも、

僕らを破壊から守り給え。

難破しなければならぬ時は、
何よりも悲惨な死に瀕して、
より思慮深くなつたのだから、
帆を港に導いて下さい。

我らが父に対する称賛、
我らが母に対する愛情、
そしてイエス・キリストの栄光、
称賛を与うるに相応しい、
聖霊に同じような誉れを。「かくあれかし。」

ヌーヴォーが船で海に出たのは、アルジェリアに旅した時とイギリスに行った時のみで、航海などしたことはありません。しかも、彼が旅する時は、ほとんど徒歩であつたのです。従つて、当然これは大海原に投げ出され

た一隻の船に乗った舟乗り達のように不安定な人々と解
釈できます。では節を追つて詩人を理解することに努め
ましょう。

第一節目は、繰り返し句となるが故に重要です。ヌー
ヴォーが彼の全作品中、二九回は使用している『Etoile
星』が、二回使われていることに注目したいのです。二
行目は、彼が一九〇五年頃に作つた詩『JE TE SALUE,
ETOILE』の題名をそのまま繰り返しています。この
詩でも、聖処女を歌っているのです。従つて、この『星』
とは、キリストの母マリアを象徴していると思われま
す。即ち、男性を表わす星ではない筈です。普通、海の
男は、南半球では南十字星を、北半球では北極星を指標
にしていたそうです。詩人であるヌーヴォーがそういった
習慣を持っていなかったことは確かですし、旅した土
地も全て北半球ですので、南十字星ではないことは確か
です。筆者個人としては、二つの詩の中で、詩人が聖処
女『Vierge』という言葉を用いているところから、乙女
座のα星スピカ(すぼし)を指していると考えたいので
すが、この星は、四月と七月の四ヶ月位しか見ることが
出来ません。北極星は、常に晴れてさえいけば見える星
ですが、どうも聖マリアを象徴しているようには思えま
せん。年間を通して見えるという点から、惑星を考慮し

ますと、女性を表わす星といえは、やはり金星です。これなら夕方にはいち早く西の空に、明け方にも東の空に見え、しかも光輝の最も強い星であり、他の惑星が赤や黄色なのに較べ青白いのですぐ解ります。その上、金星は「羊飼の星」の別称を有します。ヌーヴォーが真夜中に旅していた訳ではありませんが、彼が指標にしていたのが「金星」と考えることも可能です。

第二節で、この星は、嵐でマストを壊された船を照らす聖処女として登場します。しかしこの場合、金星ではどうも適当ではないのです。結局、夜に輝く星の中で、金星より明るい唯一の星「月」を考慮せざるを得ません。

第三節目には、はつきりとマリア様の像が神の善なる母として現われ、星が聖母を象徴していることが明瞭です。

そして四節目に、海の星が大文字で書かれています。難破中の船の中で、祈っている場所にも聖処女の像はある筈です。学校の教室にもマリアの画像が飾ってあります。そしてヌーヴォーも、カトリック信者の習慣から、首にマリアの横顔のメダリーユをかけていたことでしょう。

五節目では、フランスだけでなく、カトリックの国の

何処にでも見かけられる聖母マリアの像が、正確に描かれています。そして、少し綴を変えて、プリーエールの住民の願いによって、悪疫を追い払う為に建てられ、彼らの誓願を叶えた、やさしき聖処女に詩人は祈っているのです。

六節目も、*Dame céans* と言っているところから、プリーエールのマリアを念頭に歌っているのでしょうし、昼の支配者「太陽」に対応して、夜の支配者である「月」をも指しているのでしょうか。しかし、ここで念頭におかなくてはならないのは、「月」は移り気の象徴でもあることで、マリアとは相容れないことです。

七節目から徐々に、詩人が、他人のためにマリア様に祈っているのが解ります。

八節目も同様に、貧しき人々、恵まれない人々のために祈っています。

九節目は、神に対する願いを、二行づつに途切れた七組の小節毎に挿入しています。

十節目は、ヴァルゼル氏も指摘しておられるように、ヌーヴォーは、一九一二年八月二三日付のエルネスト・ドラエイ宛の手紙で、⁽⁸⁾どちらがよいか相談しています。その作想は

S'il faut faire naufrage

Au moins de mâle mort;

Ou de rendre plus sage

Soit la planche à ton Port!

であり、「何よりも悲惨な死に瀕して」が、「少なくとも男らしい死」で、「帆を港に導いて下さる。」が「板切れが貴女の港とならんことを」です。尤もこれでは、次に続く神の栄光を称える節と均り合わないので、結局この着想を排し、前記の文節を採用したのだと思われる。

最終節は、父である神と、母であるマリアと、息子であるイエス・キリストを称え、同じく、父と子との間の愛と思考の象徴である聖霊を称揚し、終わっています。

以上、Garde-nous d'abimer をいろいろに訳しましたが、日本語では、一言で全部を表わす言葉を、私には見い出せませんでした。ここで、ヌーヴォーが最も言いたいことは、「諸々の汚れから守り給え」ということだと考えます。

二

音韻学的見地から、この詩を、韻・母音・子音の順で

考察致します。

繰り返し句となる重要な四行から成る第一節目は、韻が (a a e) であり、モーリス・グラモンの言う「四行詩とは、二つの交韻か抱擁韻から成っている。」とは違っています。従って四行から成る節です。同様に、次に続く第二第三節も、グラモンの定義から推測すると、(a a e o a a u n) (e e e i i o j o) です。ただの八行から成る節です。そして第四節目なのですが、韻の上からも、五十八に分かれています。但、残念なことに、(o e e e) となって完全な五行詩とは言えません。後半八行も (a e e e e e e) です。グラモンによれば八行の節としか言えない。√交韻になっています。次に、五節目ですが、十五行から成る節というより、五行づつ三組から成る節と見たほうが適切です。グラモンは「五行の詩節は、二つの韻の可能な全ての組合せを認める。」と定義されていますが、この詩の場合は、(e e e e o j o j e a o e j o e j e o) となり、特に二番目は、完全押韻とは言えなくても、最も優れた五行詩節と言えます。次に六節目ですが、八行詩でも、正確な八行詩節でもなく、唯、八行でできている節ですが、これを四行づつに分けますと、立派な抱擁韻となります。|| (o a e e e e e e e e)。いづれにしろ、一応三つの韻から成る八行の節

です。第七節は八行でできている節が四行づつにする
と交韻になります(veo.eo.ee.ee)。八節目は、(e
jo.a.a.a.a.je)と交韻できています。第九節は、先
に意味上から、二行づつの小節に「願ひ」を挿入した七
組から成る節としましたが、この二行が全て(a.e)の韻
を踏んでいる為(a.e)の二組が七回繰り返されるこ
とになるのです。尤も、音韻学上簡潔にまとめてしま
うのは可能かどうか疑問でもありますが、最大の理由は、
教会での朗唱の時、指導者の力強い二行の詠誦に統一
て、全員一体となつてGarde-nous d'abimer.を、声高
く叫ぶのですが、「息つき」なしに一気に持つていくた
めです。他の節と節の間のような「休止」が全くない為
です。第十節(a.c.a.c)と、交韻の四行詩節。そして、
最終節は、(e.e.i.e.i)の完全な五行詩節+四音節からな
る決り文句で終ります。

この詩は、一応六音節で構成されています。但、(j)の
の使い方に特徴があり、第七節三行目のHyere(Jar)
の(j)と、七行目のIyon(Jic)の(j)、第九節二組
目のmanier(manje)と三組目のd'hier(dier)の(j)、
以上四つの(j)を(ii)と考えないと、六音節にはなり
得ません。しかし、ヴァールの人達、地中海沿岸人は、
非常にはっきりと、(j)を(ii)と発音しますので、作

者自身意識して使っているとも考えられます。

次に母音の分析ですが、ピエール・レオンの調査によ
りますと、フランス人(仏領フランス語圏を含む)によ
る使用頻度は、前舌母音の場合、文章中三四・〇三%、
会話中三二・六一%。奥舌母音は同様に、五・七九%と
七・三%。そして鼻母音が六・七八%と七・三%となり
ます。⁽¹²⁾この詩を分解した結果、七八四母音^{フランス}十九四二子音
(半子音wを含む) || 総数一七二六音です。内訳は、前舌
母音が、前述の使用頻度とほとんど同じ三四%、奥舌母
音が七・九四%、鼻母音が三・四二%です。ここで注目
すべきは、フランス語に甘い響きを与えている鼻母音
が、一般使用頻度の約二分の一しかないことです。⁽¹³⁾
子音につきましては、一般使用頻度で、文語中一二・五
四%、口語中一三・三%も占める無声閉鎖音(p.t.k)
が、この詩では八・五一%しか占めておらず、一般平均
の約三分の二弱でしかありません。ところが反対に、一
般使用頻度六・一八%と五%の有声閉鎖音(b.d.g)は、
二倍近い一〇・四三%となります。狭窄音に関しまして
は、これ程の差はありませんが、やはり七・四三%と
七・六%の無声音(f.s.j)が、六・三七%と少ないのに
反し、一八・五三%と一八・四%の有声音(v.z.s.l.c)
は、一九・四%と多くなります。鼻子音(m.n)は、

鼻母音の少なさを少し補うかの如く、一般使用頻度五・七二%と六・三%が、七・六%と多くなっています。流音のみを考察しますと、(7)は、文語中に六・四三%、口語中に六・八%ある一般使用頻度に較べ、海を題材にしているにも拘らず、五・九%しか占めておりません。(7)は、頻度割合が七・四と六・九ですが、この詩では、八・四と高くなっており、ここで少しだけ、風が帆を震わせるのを連想することができまます。

一九七九、八〇、八一年の過去三回づつのジェルマン・ヌーヴォー友の会の集いと、プリーエールで開かれるミサで、この詩の朗読を、皆と共に唱和する都度、内容が祈りであるにも拘らず、常に、まるで組合闘争の掛け声のようで、大変奇異な感じを受けましたが、以上述べてまいりましたように、鼻音(母音・子音)が、全平均の一五%も少ないことと、無声音が、同じく全平均の二五%以上も少ないのに反比例して、有声音が二〇%以上多いことに起因するのではないかと考えます。特に、(8)が、行の最初にあることによつて、フランス語個有の美しさを弱めています。ルイ・フォレストイエ氏は、「ジェルマン・ヌーヴォー」の中で、詩人の最後の数年を語った後で、「... C'est qu'en dépit de la misère, en dépit des sursauts de colère, à

travers les mortifications et les pénitences, il marche vers le havre ultime: ⁽²⁴⁾それは彼が、貧困にも拘らず、怒りの噴出にも拘らず、難行苦行や贖罪をとらうして、最後の港へと歩いて行くことである。」と評し、繰り返し句の三行目迄と四節目五行目までのみを引用しておられます。フォレストイエ氏もふれられているように、ここには、マリアへの願いや祈りとともに、詩人の怒りや自分を打ちながら歩き苦しんだ喘ぎが感じられるのです。詩人が、とても鼻音など使える状態ではなかったことが理解できますし、美しさを壊すほどの有声音の多さも理解できます。そして、これらの要因が、ゼーゼーと息を切らしながら、坂の多いプリーエール村やエックスの街を歩いている詩人の姿を彷彿させるのに、大きな効果を与えているのです。

三

詩人が、宗教実践者であり、Errants (放浪者、信仰において迷える人々)の一人であった以上、この詩が聖母マリアへの祈りである以上、言及したいのは原罪についてのフランス人の考え方です。卑近な例を上げることをお許し願いたいのですが、一九七七年六月一日からの二回目の滞欧中(うち四ヶ月はジュネーヴ)四年一ヶ月

を通して、職場の同僚、取引先の人々、出入りの業者、大学の教授及びゼミ仲間、寮の学生及び使用人達、そして年七回は行った汽車旅行の同じコンパートメントの人達、パリ市及び近郊、トノン、リオン、ヴィルルバンヌ、マルセイユ、ニース、エックス、ジュネーヴ及び近郊に住む友人達（即ち一回目の滞欧中友人になった人々等）、先々で訪れた教会の司祭達と、あたり構わず、原罪について尋ねたのですが、イヴのリンゴの話を必ずあげ、「そんな抽象的なことではなく、どんな意味と思いますか」という問いに、何人かの者が、階級を問わず嫌な顔をし、教授及び謂大学関係者は、「簡単に話せる問題ではないので考えてきます。」と答え、会社員の何人かが共通の答えを示しました。それは「神は我々に、彼と同等の者になる価値を持つようにと、原罪を与えたのだと思います。」と言うものです。そして特に興味深いのは、司祭の答です。リオンの一人は「生れながらにして、子供が原罪を背負って来なければならない理由などありません。」と答え、リオンのプラド派の神父とマルセーユの尼は、「人間は如何なる誘惑にも大変弱いのです。そのことを原罪と呼んでいるのです。」と答え、トノンの二人の司祭、プーリエールとラ・ヴァレットの司祭方は、「時間のある時にお話ししましょう。それにこん

な処で話すべき問題ではありません。」と教会の中でおっしゃったのです。そして、本当に意外だったのは、ほとんどの労働者（会社の下働きの人達、左官屋、水道工事屋、掃除人達）や旅で出会った農民達が、明確に、なんのためらいもなく違いはあれ、即答したことです。彼らの大体四分の一は、アダムとイヴの説明をした後、「私は信じません」と言い、他の四分の一弱は、前述の神父と尼の答えにはほとんど同じ答えを即座に言いました。そして特に注目すべきなのは、約二分の一強が、はっきりと「愛することの難かしさです。」と答えたことです。独断と偏見にすぎないかも知れませんが、現代社会では、やはり、知識層より、あまり教育のない者達のほうが、信仰の心が強いと思います。日本の江戸時代に、浪人という特殊な立場に落ち入った武士が、寺の一隅や、町中で子供に手習いを教え、十九世紀中期には、六〇%の者は読み書き算術が出来たのとは違い、以前エクスプレス誌にも書かれていたように戦前は三三%の人間が文盲だったと言うフランスでは、ヌーヴォーの生きた時代は尚更のこと、読み書きの出来ない人が多かった筈です。教会の司祭のおっしゃることを丸暗記して多くの事を覚えた神信厚き人々が、現在より多くいたと思えます。彼らも又、現代の労働者や農民のように即座に答

えられたでしょう。それは「どうしてすぐそう言えるの？」という質問に対し、「家って言うか、我々の村ではそう思ってるよ」と答えることから推察できます。宗教実践者でもない人間が、宗教について語るのは危険なことだと承知しておりますが、少数を除いて、原罪というものを持たない我々日本人も、一度は考えてみるべき問題であると確信しますので、敢えて考察を続けます。

個人的には、ヌーヴォーは「愛することの難かしさ」よりも「愛されることの難かしさ」を感じていた人間だと考えます。前述の初期の作品

空には緑色の星もなく、
どんな陰惨な三途の川かは知らないが、
周りの水の上に波紋を描いている素晴らしい0の中央
に、
僕の魂は物淋しく浮いている。

には、彼のそういった本性がありありと現われています。フォレストイエ氏も書かれているように「... une sorte de passivité qui n'est ni abandon, ni faiblesse. Il n'est pas de ceux qui s'emploient avec énergie à reconstruire la réalité; il la subit, parfois avec

volupté. Sa vie, son œuvre en témoignent, Il va, pareil au morceau de liège, toujours sollicité, toujours à la merci de courants divers. ⁽¹⁵⁾ ある種の受動性はなげやりでもなければ弱さでもない。彼は精力的に現実を建て直すのに忙しいといった類の者ではない。彼はありのままを受け入れる。時には喜んで受け入れる。彼の生涯が、彼の作品が、この受動性を示している。彼は一片の「浮き」に似て、常に外部に作用され、常に多様な流れのまにまに流れていく。」ヌーヴォーは本質的に「あるがままを受け入れる」人間であり、愛をも唯「誰かが愛してくれるのを待っている」人間のようです。もし「愛することの難かしさ」を感じていた人間、即ち積極的な人間であったのなら、この四行詩のような魂の叫びは生れないと考えるからです。ヌーヴォーについて、同世代のヴェルレーヌやジャン・リシュパン等は、「感じの良い青年」と言っていますが、常に傲慢で、お愛想とは縁のなかったランボオとは違い、ヌーヴォーは、常に他人から気に入られようと努めていたようです。それは、我日本国で、親達が、しばしば子供に向って「およしなさい、他人に嫌われますよ。」と言う言葉を連想させます。ヌーヴォーは、早く両親を失ったせいもあって、常に「人から愛されたい」と願っていたであ

ろうことは想像にかたくありません。そして、多分ランポオの影響によって、彼は、積極的な人間へと、自分を變えていったのだと考えます。事実、不成功に終りはしても、『VALENTINES』⁽¹⁶⁾に見られるように、愛そうと努める人間へと徐々に變化しています。そして、自分自身を知ること而努力しているのです。しかし、最後迄、本当に愛を知ることができたかどうか甚だ疑問です。ジェルマン・ヌーヴォー友の会でも、そこに集まる人々は、難行苦行の原因を、当然の如く、ランポオとの肉体的關係に帰しておられますが、私は寧ろ、本当にランポオと愛し合っていたのなら、決して苦行などする必要はなかつた筈だと考えます。何故なら、相手が誰であれ、真底純粹に人を愛することのできる人間を、神が罰することなどあり得ないからです。種々の大罪は、全て、後の人間が作り上げたことで、キリストが自ら書き残している訳ではありません。ヌーヴォーが苦行しなければならなかつたのは誰をも真から愛することが出来なかつたからです。ここで想起しなければならぬのは、イエス・キリスト自身、自ら苦行などしていないことです。彼の最後において、苦行せざるを得ませんでした、それは父なる神が与えた試練で、彼の意志ではありませぬ。詩人は自分自ら望んで苦行したのです。勿論、キリ

ストの最後に準えて、苦しみを分かち合う為、キリストは我々の罪を一身に引き受けて、苦しみを受け入れて下さったのだ¹⁷、という考えで、彼もそれに倣ったのだと言えるかもしれません。しかし、キリストもヌーヴォーも、誰をも平等に愛しはしても、自分を投げうってまで真から人を愛することがなかつたことに贖罪の大きな要因があるのではないかという疑問を持つのです。キリスト教徒にとっては神であるキリストも、ユダヤ教徒にとっては一人のラビです、イスラム教徒にとってはマホメットと同じく一人の予言者です。まして、仏教徒や神道者にとつては、他国では神と呼ばれる人間でしかないのです。従つて、ここで、ヌーヴォーと同じ位置にキリストを置いて論じます。詩人自身、父なる神と母なるマリヤと呼び、キリストを彼らの息子と見做しています。そして人間全ては神の子なのですから、要するに兄弟な訳です。キリストは「汝の敵を愛しなさい、汝を呪う人々を祝福なさい、汝を憎む者達のために祈りなさい、汝を虐待し、汝を迫害する者達のために祈りなさい。」⁽¹⁷⁾と言われましたが、ヌーヴォーも、この詩の中で皆のために祈っています。尤も、彼は、正直な人間ですので、自分の敵のためには祈っていませんが、彼には敵などいなくなつた筈です。敵がいるということは、自ら敵を作り出し

たということ。自分を憎み、虐待し、迫害する人間がいるということは、やはり、そこには大きな理由がある筈です。勿論キリストの場合、影響力が大きすぎて、時の統治者を脅やかしたことから、全く信仰に根差すもので、ここで彼の責任を云々することは控えます。しかし、一般の人間にとって、常に自分に原因を求めるのが最も良い方法です。ヌーヴォーが苦行しなければならなかった理由は、やはり自分自身の意識の問題であった筈です。

四

ヌーヴォーの死について、ヴァルセル氏は、次のように記しています。「Attentif à tous les jeûnes de l'Église, il avait tendance à les exagérer, ne se nourrissant que très légèrement un jour sur trois. En 1920, après quarante jours de ce régime, ses forces l'abandonnèrent et il mourut d'initiation entre le vendredi saint et le jour de Pâques. Etonnés de son absence aux offices de la Semaine sainte et de Pâques, les voisins alertèrent les autorités; le garde champêtre, monté sur une échelle, enfonça la fenêtre du premier étage de la

《tour Gombert》, le mercredi matin, 7 avril, et l'on trouva le cadavre décharné du pauvre Nouveau pelotonné sur son affreux grabat plein de vermine. (Pl. pp. 328-329) 教会の全ての断食に忠実な彼は、やりすぎの傾向があり、三日に一日ごく少量の物しか口にできなかった。一九二〇年に、四十日の断食の後、彼の生命力は彼を見捨て、聖金曜日と復活祭の間に餓死した。聖週間と復活祭の行事に彼が欠席しているのに驚いて、隣人達は当局に急を報じ、田園監視人はハンゴに登って、ゴンベール塔の二階の窓を押し破った。四月七日水曜日の朝、人々は、蛆で一杯の恐るべき粗末なベッドの上に、身体を丸めた可哀想なヌーヴォーの肉の落ちた死体を見出した。」このように、フランス人としては、多分、今世紀の日本人としては考えられない死に方をしています。同じでもう一度、フォレストイエ氏の註を引用致します。「... jusqu'à cette semaine sainte de 1920 durant laquelle il se barricade chez lui selon son habitude, pour faire pénitence. Il entre dans l'éternité seul, à l'insu de tous, 《petit et misérable》. Comme le Christ, qu'il voulait suivre pas à pas, il aborde les ténèbres entre le vendredi saint et le jour de Pâques.

Voici venir le temps de la Résurrection...⁽⁸⁷⁾ 一

九二〇年の聖週間の間、彼はづいものように苦行のために自分の家の中に閉じ込めらる。彼は、皆には知らせずに、⁽⁸⁸⁾「小さくして惨めな」永遠の孤独の中に入る。キリストのように彼は一歩一歩を追うかの如く死ぬことを望んだ。彼は聖金曜日と復活祭の日の間に闇に到達している。今やキリストの御復活の時がやって来る。」そして、ヴァルゼル氏の詩人の死に対する考えを知るため、彼の序論の最後の部分を引用致します。「C'est un exil complet de sa personnalité d'homme de lettres, une sorte de saint déclassé qui meurt sur le grabat de Pourrières à l'aube de la fête de Pâques de 1920. (Pl. p. 349) ⁽⁸⁹⁾それは文学者としての人格からの完全な陰棲であり、社会的地位を失ったある種の聖人が、プーリエールの粗末なベッドの上で、一九二〇年の復活祭の夜明けに死んだということである。」

以上のように、両氏とも、ヌーヴォーを、聖人のように扱っています。乞食行脚がほとんど不可能なフランスでは、彼のような死に方は驚異なのです。従って、ある意味では、ヌーヴォーは、何人にも出来ないことをしてのけた男である訳です。その上、どんな階級の人間でも、自分の財産・権利・義務はガッチリ守るといったヨ

ーロッパ人の中で、ヌーヴォーは例外中の例外と言えるのです。ここで再び、ヴァルゼル氏の興味深い註を引用致します。「Nouveau se plaint nu et seul. Il pratique dénuement absolu, en se plaignant que le monde ne voie dans l'exercice de la plus haute vertu qu'un péché contre la société. Sauf à son perfectionnement intime, il a renoncé à tout, à tous les biens de la terre, aux livres, à la gloire. (Pl. p. 348) ⁽⁹²⁾ヌーヴォーは、無一物と孤独を好んだ。彼は、世間が、最も高い徳の行使の中に、社会に反する罪をしか見ていないことを嘆きながら、徹底した貧窮を實踐した。彼は、内的改善を除いて全てを放棄した。全ての土地財産を、書籍類を、栄光を。」このように、我国では乞食行脚として見られる彼の行為も、彼の国では、一般社会道徳に反する罪としか見做されないことを明示されています。フランスの謂普通の会社員の中には、詩人について勉強していると聞いただけで、暇人の道楽とみる人が多くいます。ましてや、現在よりも封建的で、社会が不安定であった十九世紀中期から第一次大戦後に生きたヌーヴォーが、周囲の者から白い眼で見られていたのは当然でした。同じように騒然とした時代に生きた、

我国の放浪詩人山頭火(一八八二年十二月三日—一九四〇年

十月十日)は、如何に彼が温泉好きで、ヌーヴォーよりも清潔であったとは言え、白い眼で見られたという話は見出し得ません。やはり、これは他人に対する態度、即ち、「愛することの難かしさ」を感じている民と、「愛されることの難かしさ」を感じている民との違いであると考えます。

ここで、「死」に対する日本の身の処し方を述べた、故唐木順三氏の文を引用致します。「……死は必然であって、生は僥倖事にすぎない。この僥倖に頼ってはならぬといふのである。臨終、往生が最大の關心事であり、この關心事はみづから生きながら往生することによってそれ自身を超越する。」この文は一遍について述べられたものですが、まさしくここに、ヌーヴォーの最後の数年の姿を見出すことが可能です。この文に続けて、一遍の和歌を紹介され、彼の念仏三昧となるまでの過程を説明された後、「飢死を覺悟し、野のはてにされかうべとなることをも覺悟した一遍に不可思議な世界があらはれてきた。念仏者のよろこびにあふれた世界である。苦痛の行脚ではなく、よろこびの遊行がでてきた。遊行上人と彼はよばれたが、遊行こそ彼の栖であったといつてよい。『山河草木、ふく風たつ波の音までも念仏ならずといふことなし』(語録)といふ世界がひらかれたので

ある⁽²³⁾」と解釈しておられます。この文章を思うたびに、私はヌーヴォーが、もし日本で生れていたのならと、考えずにはおれません。キリスト教の世界にその偉大なる指導者が、大きな十字架を背負われ、ゴツゴツの坂道を、荆の冠を着けさせられ、民衆の罵倒を浴びながらゴルゴタの丘迄歩き、衣服を剥ぎ取られたうえ十字架にかけられ、槍で突かれて、一声叫んで息絶えた。その上、どの教会でも、十字架に、息もたえだえにぶら下っている男を見せられて育たなければならぬ世界で生きたヌーヴォーは、罪の意識を持たざるを得ず、自分を贖罪しなければならぬと考えざるを得なかつたのです。そして、詩人が救いとして求めたのが、幼ない時から散々聞かされていたであろう御利益厚いマリア様です。プリーエールの農民にとつて最も頼り甲斐のある聖母マリアです。この詩の中でも、明らかに、何から何まで叶えて下さるように、赤子が母を求める如く、マリアに祈る詩人の姿が彷彿としています。しかし、自分の願ひ全てを叶えて載くには、自分自身を痛めつけなければならぬと考え、全てを捨て、苦行して、恵深き世界に召されることを望んだのです。

以上私は、ヌーヴォーの研究者達にとつて、あれ程有名な、一八九一年に詩人の上に起きた神秘的事件、それ

に続く精神病院での生活、その後の聖ブヌワ・ジョセフ・ラーブル⁽²⁸⁾への追慕の念について述べませんでした。そのことは、又次の機会に詳しく言及するつもりですが、私見としては、唯単に、詩人が精神的に追いつめられた結果の発作、そして自己の深淵に潜む欲望の表現であり、その望みに叶った姿として聖ラーブルが彼の思考に入り込み、一遍が空也を尊敬し追慕したように、ヌーヴォーもこの聖人の足跡を辿っただけであると考えます。

仮定が許されるなら、もし我國の捨て聖達が、彼の国で生れていたのなら、やはりヌーヴォーと同じ行為をしなければならぬ境遇になっていたでしょう。即ち、苦行は決然と苦行として受け入れ、ことさらに自分を苦しめ、施をも要認することがままならず、ましてや安心立命などと程遠く、自分の祈りをわざわざ公開し、肉体と魂を全く別個のものとして、墓のようなアパートに亡骸を晒して死ななければならなかったでしょう。その反対に、もしヌーヴォーが日本で生れていたのなら、自分の持つて生れた特性を保てたと思われます。即ち、或は人に囲まれ、或は一人で、自然の立てる全ての音に耳を傾け、それをも祈りと見做し、苦行とも思わずにただ自然に滝に身を打ち、粗衣粗食に甘んじ、ワラの小屋に寝起

きし、台風や大雨の被害をも再建への喜びと見做し、ただひたすらに祈り続け、或は友人や弟子に囲まれた釈迦牟尼の如く、或は山野で唯一人屍となった聖の如く、物静かに死んでいけた筈です。

五

アヴェ・マリス・ステラを通読し、詩人の姿勢を考える時、すぐに頭に浮ぶのは、芭蕉の有名な次の文です。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」芭蕉はこの文の如く、大阪の旅の宿で、最後迄、俳句に未練を残しながら、死へと旅立ちました。一遍も西行も宗祇も、同じように旅の宿で、弟子達に囲まれて、最後の旅へと発って行きました。ヌーヴォーが、日本の同じく歌を残した聖達と大きく違うのは、この詩の中でも明確に祈っているように、最後の旅立ちに向うための「港」に流れ着くことを望んでいたことです。そして望みどおり、彼の港である生れ故郷の小さなカタツムリのような村に落ち着き、港の中の錨を降す場所として、質素なアパートを選び、そこに自分を縛りつけ、最後の旅へと発ったことです。

結局彼には、全つを捨てざるゝことができませぬといふた。生れながらの性格を活かし切ることができなかったのです。しかし、それ故に、ヌーヴォーは、ランボオから継承した姿勢、「自己を委ねる」のではなく、「自己を把握してしまふ」ことに成功しました。彼は、一度自己を全く無にして、そこから又別の自分自身を創りあげたのです。ヌーヴォーも又「ランボオと同じように」*“Je est un autre.”* と語つたのだ。

註

- (1) *Germain Nouveau (et Lautréamont) Oeuvres Complètes*, édition établie, présentée et annotée par Pierre-Olivier Walzer, coll. “Bibliothèque de la Pléiade”, Paris, 1970, p. 370. 以後 Pl. p. … と略す。
- (2) *ibid.*, Pl. p. 750.
- (3) *ibid.*, Pl. p. 980.
- (4) *ibid.*, Pl. pp. 755-758.
- (5) *moult accorte*, が、ヴァール地方の方言である為、南仏生れの南仏育ちのフランス人の助言で、*tres gracieux et vil.* と訳した。
- (6) 筆者も訪問したが、ヌーヴォーのパートナーは、二階ノ外から直接入るようになっており、ナンシヨがかけてある。
- (7) *op. cit.* Pl. pp. 700-703.
- (8) *ibid.*, Pl. pp. 996-998.
- (9) *PETIT TRAITÉ DE VERSIFICATION FRAN-*

- (10) *ÇAÏSE, MAURICE GRAMMONT*, Coll. U. Lib. Armand Colin, Paris 1965, G. p. 91. 以後 G. と略す。
- (11) *ibid.* G. p. 85.
- (11) *ibid.* G. p. 82.
- (12) *PRONONCIATION DU FRANÇAIS STANDARD*, Pierre R. LÉON, Lib. Marcel Didier, Paris, 1966, L. pp. 33-42. 以後 L. と略す。
- (13) *ibid.*, L. p. 78.
- (14) *GERMAIN NOUVEAU*, un essai de Louis FORESTIER, POÈTES d'aujourd'hui 203, Ed. PIERRE SEGHERS, PARIS, 1971, F. p. 152. 以後 F. と略す。
- (15) *ibid.*, F. p. 29.
- (16) *op. cit.* Pl. pp. 567-673.
- (17) *Nouveau Testament-Psaumes*, Traduction d'après le Texte grec par Louis Segond, Gideons International Edition 1978, Mathieu V : 44.
- (18) *op. cit.* Pl. pp. 328-329.
- (19) *op. cit.* F. p. 153.
- (20) *op. cit.* Pl. p. 349.
- (21) *ibid.*, Pl. p. 348.
- (22) 唐木順三『無用者の系譜』(筑摩叢書 23) 昭 39 頁。
- (23) 同右、四十頁。
- (24) 勿論、カトリック圏の教会を指す。
- (25) *BENOÎT-JOSEPH LABRE* (saint) *Mystique français* (Amettes, Arois, 1748-Rome, 1783). Il parcourut les routes d'Europe en pèlerin mendiant. Il a été canonisé en 1881. Fête le 16

avril. (ROBERT 2)

参 考 文 献

- Germain NOUVEAU, *Poésies d'Humilis et vers inédits* ;
préface d'E. Delahaye, Ed. Albert Messein, Paris,
1924.
- Catalogue de l'exposition G. Nouveau, Paris, Bibliothèque
Sainte-Genève, fonds Doucet, 1951.
- Germain NOUVEAU, recueil collectif d'articles par M.
A. Ruff, M. Dabadie, H. Coulet, L. Forestier, R. J.J.-P.
Mim, M. Pakenham, C. Pons, Paris, Minard "Avant-
siècle 2", 1967.
- Lovichi (Jacques) : *Le cas Germain Nouveau*, Marseille,
Les presses de Jean Charbonnier, 1964.
- Lovichi, Walzer : *Dossier Germain Nouveau*, Neuchâtel,
Ed. de la Baconnière, 1971.
- Pakenham (M.) : *Sur l'Album zutique*, Mercure de
France, août 1961.
- Walzer (P.O.) : *La Révolution des sept*, Genève, A la
Baconnière, 1970.
- 『芭蕉文集』杉浦丑一郎、高本三郎、萩野清枝注(岩波書店、
一九七八)
- Gondé (Namiko), *Bashô et Nouveau : Etude comparative
sur les poètes errants*. Thèse de Parisx, dactylographiée,
1980-1981.